

MACC^{マック}通信

Monozukuri Arakawa City Cluster

第31号

2015年1月7日発行

荒川区が進める『MACCプロジェクト』は、荒川区の特徴である多彩な産業集積を生かした、区内企業同士の顔の見えるネットワークの形成を推進することによって、荒川区の産業振興を図るものです。

「MACC通信」では、この『MACCプロジェクト』に関わるホットな情報をお届けします。

今回は、「都産技研見学ツアー“3Dものづくりのイマを知る・見る”の報告」、「アフリカ諸国の国連大使による区内企業訪問」、「MACCプロジェクトによる展示会への出展報告」、「あすめし会活動紹介(第3回下町サミットの開催、信金発 地域発見フェアへの出展)」、「第2あすめし会活動報告(足利視察、定例会の実施)」等について掲載します。

「都産技研見学ツアー ～3Dものづくりのイマを知る・見る～」を開催！

荒川区及び(地独)東京都立産業技術研究センター(都産技研、江東区青海)が主催となり、台東区、豊島区、北区、板橋区(板橋区産業振興公社)、足立区、葛飾区と連携して、いま話題の3D(3次元)ものづくりの実情を視察するため、3Dプリンタなど最新の設備・機器の利活用を進めている都産技研の見学ツアーを12月10日(水)に実施しました。

～下町7区共催の研修事業～

この見学ツアーは、中小企業の製造業が集積する下町7区が連携して、『3Dものづくりのイマを知る・見る』を目的として実施し、最新技術に関心を持つ経営者ら約100人が参加しました。

冒頭、主催者の荒川区産業経済部の勝田健一経営支援課長が「新たな技術の潮流を自社経営に取り入れるヒントをつかむと同時に、公的機関の最新設備をうまく活用するチャンスとしてほしい」とあいさつ。都産技研の近藤幹也多摩テクノプラザ所長から「産業用CT(非破壊透視試験機)と3Dプリンタ(造形機)を連動させた3Dデジタルものづくり支援事業」の説明を受けた後、講演会、施設見学会、交流会が行われました。



支援事業を説明する
近藤所長

～製造現場を変える3次元の技術革新～

講演会『3Dものづくりのイマを知る』では、東京大学大学院工学系研究科精密工学専攻の大竹豊准教授が『産業用X線CT装置による形状測定とその活用』と題して講演。その中で、X線CT装置と計測対象や、産業応用の現状を紹介し、「3DプリンタとX線CT装置を連携させることで複雑な形状を手軽につくれる」などの研究成果をもとに、「X線CT装置は計測精度・スピードの向上で今後、本格的に普及する」と述べました。



大竹准教授による講演

また、都産技研の阿保友二郎電子・機械グループ長が中小企業者が知っておかなければならないこととして、『3Dプリンタによるプロトタイプング(試作品の製作)』と題して講演。粉末焼結法や積層造形法、インクジェット法などに使用する設備や造形技術の現況を解説し、「3Dの活用で、ものづくりのプロセスがデジタル化する」と強調しました。



阿保グループ長による講演

～盛り上がった施設見学！～

施設見学会では、参加者は5班に分かれて都産技研に備えられている3次元の最新設備・機器を見学しました。粉末焼結法の3Dプリンタとその活用事例



会場の様子

定員を超えるお申込みがあり、関心の高さが伺えました。

をはじめ、自動車エンジンから小型電子部品に対応するX線CTスキャン装置、さらに世界最高水準の精度を誇るという3次元切削加工機や3次元測定機器なども実地に見聞しました。その後の交流会では、講演を終えた講師や、都産技研の技術者、支援機関の担当者らも交えて、3Dものづくりに関する話題に包まれました。



施設見学会の様子

アフリカ諸国の国連大使が区内企業の視察をしました

荒川区は12月3日(水)、外務省の依頼により、ニューヨークの国連に常駐するアフリカ諸国の代表(国連大使)6名の区内企業視察を受け入れました。外務省は、各国国連大使を日本に招き、日本の政策に対する理解を深めてもらうとともに文化や技術を紹介する事業を以前から行っており、今回の視察はその一環で行われたものです。

視察先として、「株式会社マツダ自転車工場」にご協力をいただき、冒頭、豊泉シニアコーディネータからMACCプロジェクトを説明し、続いて松田社長による講演、実際の製作現場の見学をしました。各大使からは、松田社長の技術に対し感嘆の声が上がり、区内企業の技術の高さを海外にP

Rする絶好の機会となりました。最後には自転車に試乗し、匠の技が注がれた自転車の乗り心地や操作性の良さを体感しました。各大使の笑顔が印象的であり、視察は大成功に終わりました。



ロー付(溶接)を披露する松田社長



試乗で笑顔溢れる国連大使

MACCプロジェクトを広く紹介しました(展示会への出展) 「朝日ビジネスマッチング2014&つくば産業フェア2014」

～朝日ビジネスマッチング2014～

10月21日(火)に開催された「朝日ビジネスマッチング2014 ～つなぐ力、きずく力～」は、企業・大学・バイヤー等が情報・意見・知見・技術を共有することでビジネスチャンスを広げるとともに、関係性を深め、地域社会の発展につなげることを目的として、朝日信用金庫が東京ドームホテルにて開催したもので、昨年に続き2回目の開催です。

当日は、128の企業ブース、73の支援機関・大学ブースが設けられ、MACC会員からも数社の出展がありました。会場内は、約3,000名の来場者とのBtoBに特化した本気の商談が活発に行われ、熱気に包まれていました。

荒川区のブースではMACCプロジェクトの取り組みやMACC発新商品を中心に紹介し、「自社も新商品開発に取り組みたいので参考となる」との声があるなど、来場者の関心を集めました。また、支援機関からの海外展開支援のご紹介や、大学からのアプローチもあり、MACCプロジェクトの「顔の見えるネットワーク」の拡充にも繋がりました。

～つくば産業フェア2014～

10月25日(土)・26日(日)の2日間に渡り開催された「つくば産業フェア2014」は、産業の活性化に資する科学技術・地域資源等を広く紹介し、TX沿線自治体関係者・商工業者等との相互交流の場を創出することで、地域の活性化を図ることを目的として、つくば市及びつくば市商工会がつくばカピオにて開催したもので、今回で11回目の開催となりました。同時に「つくば農産物フェア2014」も催され、地元のファミリー層を中心に、多くの人が両会場に足を運び賑わいました。

産業フェアでは、約50のブースが立ち並び、来場者への事業の紹介や、商品の即売が活発に行われました。荒川区のブースでは、MACC発新商品や観光スポットを中心に「荒川区」を多くの方に紹介することができました。



つくば産業フェア出展の様子

あすめし会活動紹介① 「第3回下町サミット」の開催

荒川区、足立区、江戸川区、墨田区、豊島区などの中小企業の若手経営者らが中心となって、地域の枠を超えた連携を図る「第3回下町サミットin足立」が10月22日(水)に北千住で開催されました。当日は定員を上回る130人余が集まり、グループディスカッションや名刺交換会、交流会を通じて“顔の見えるネットワーク”づくりが盛り上がり、広域的な異業種交流・異分野交流が展開されました。

～荒川区の「あすめし会」が先導！～

下町サミットは、「東京23区内で精力的に活動している企業・個人・グループが集まり、情報交換を行い、つながっていくオープンなイベント」です。火付け役は、MACCプロジェクトの若手経営者らで構成する「明日の飯の種をつくる会(あすめし会)」で、昨年10月に荒川区内で第1回を開催したのが始まりです。

今年7月に、江戸川区の「江戸川で創る会(飯)」、豊島区の「池袋経営勉強会(イケベン)」が加わって、江戸川区内で第2回目を開催。さらに今回は、足立区の「あだちブランドyouth(足立区認定ものづくり企業若手経営者異業種グループ)」が主催するなどイベントの推進基盤を拡大し、より多くの若手経営者・事業者をはじめ、ものづくりの専門家や中小企業支援の公的機関の関係者らも参加する盛況な催しとなりました。

～公的支援機関も応援～

講演会では、深海探査船(江戸っ子1号)の設計・製作にも携わった浜野慶一氏((株)浜野製作所代表取締役)が地域を元気にする取り組み事例を紹介し、「さまざまな人の意見を聞き、ニーズに応えていく



講演に聞き入る来場者

ことが地域の活性化になる。そのための情報拠点を整備し、横断的なネットワークを広げることが欠かせない」と地域間連携、産学官連携の重要性を強調しました。

また、10月末に東京駅至近に中小企業・小規模事業者のための新タイプの施設「TIP*S(ティップス)」を開設した独立行政法人中小企業基盤整備機構が「起業したい人、悩みを解決して次のステップに進みたい人、出会いを広げたい人などの“想いをカタチ”にする施設なので利用してほしい」(TIP*S担当・岡田恵実氏)とアピール。施設の利用を呼びかけていました。

～人と人とのつながりが狙い～

グループディスカッションでは、参加者を18のグループに分けて、中小企業支援機関への期待などについての討議、発表を行いました。次いで、参加者同士の名刺交換会と、自由に動いて個別に懇談する交流会が行われ、会場内は熱気を帯びました。

毎回参加している経営者は「その都度仲間が増え、事業展開のモチベーションが高まる」、初参加の事業者からは「気軽に交流できる雰囲気なので、パートナーシップを築く機会になる」との声もありました。



名刺交換も積極的に！

下町サミット開催の先導役を務める、あすめし会代表幹事の遠藤智久氏((株)日興エボナイト製造所代表取締役)は、「連携の場として交流サイト『facebook』を活用して有益な情報を交換し、最終的には、下町サミットを東京23区の全区で開催し、23区の経営者をつなぐネットワークを構築したい」と夢を語っていました。

おすすめし会活動紹介② 「信金発！ 地域発見フェア」への出展

11月12日(水)・13日(木)に東京ドームにて開催された、「信金発！地域発見フェア～全国のイチオシ企業と物産が東京ドームに大集結～」に、おすすめし会が出展しました。

このフェアは、全国の信用金庫イチオシ企業が一堂に集結し、販路拡大、企業間連携、情報交換や各地域の物産展示・販売などのビジネスチャンスの場の提供を目的として、信用金庫が連携して開催したものです。

当日は、600を超える出展企業のもとへ、ビジネスマッチングや物産品の購入を目的に多くの方が押し掛け、その人数は2日間で33,200人にものぼりました。



会場全体の様子

おすすめし会は、メンバーに加え、MACC会員企業の(有)スガワラ印刷(東尾久3)及び(株)堀澄(南千住2)も加わり、2ブースにまたがり出展し、各企業の商品

や技術の紹介・販売を行いました。

企業が連携して出展しているブースは珍しく、また、荒川区のシンボルキャラクター



「あら坊」も駆けつけて応援し、多くの方が足を止めていました。

終了後、おすすめし会代表幹事の(株)日興エポナイト製造所(荒川1)代表取締役の遠藤氏にお話を伺ったところ「BtoCを目的にした来場者だけでなく、BtoBを目的にした方もおり、複数の商談ができた。

また、MACC発新商品も多く注目を集め、特に(株)ストロング(荒川4)の“バーバパパお掃除スリッパ”は売れ行きがとても良かった」と成果を語っていました。



MACC発新商品の
“バーバパパお掃除スリッパ”

第9回MACCプロジェクトフォーラム 女性限定イベント

「WOMEN'S NETWORK ～女性のつながりが未来をつくる～」

女性の起業家や経営者の活躍が注目され、女性の活躍によって新たな製品やサービスを生み出す企業が増えるなど、産業や地域の活性化を促進させるキーファクターとなりつつあります。

今回のフォーラムは、女性が更に活躍するためのつながり「顔の見えるネットワーク」をつくる場です。トークセッションでは、女性のつながりをプロデュースしている3名の素敵なゲストが登壇します。

フォーラムに参加して、ご自身の可能性を高めるネットワークをつくりませんか？

イベントコンテンツ

ゲストトークセッション

「女性のチカラ、つながり、未来」をテーマに3名のゲスト講師がトークします！

ゲスト：横田 響子 氏 (株式会社コラボ代表取締役)

宮本 直美 氏 (CocotoGroup代表)

猪熊 真理子 氏 (株式会社OMOYA代表取締役)

交流会 名刺交換など、参加者同士で自由に交流できます。(ゲスト講師の方も参加します)

【開催日時】平成27年2月2日(月) 14:00～17:15(受付13:30～)

【会場】サンパール荒川 5F 第7集会室(荒川区荒川1-1-1)

【対象】起業家(起業間近の方も)、経営者、管理職の方など(いずれも区内外を問いません)

ただし、女性限定です。

【定員】50名(事前申込制、申込み順) 【締切】平成27年1月29日(木) 【費用】交流会含め無料

【申込み・問合せ】荒川区 産業経済部 経営支援課 産業活性化係

TEL:03-3802-4807 FAX:03-3803-2333 MAIL:macc@city.arakawa.tokyo.jp



第2あすめし会活動報告① 足利市の「街ぐるみの5S活動」を学ぶ

第2あすめし会のメンバーを中心とする視察団は、街ぐるみで5S(整理・清掃・整頓・清潔・しつけ)活動を展開している栃木県足利市を9月19日(金)に訪ね、その先進的な取り組みを学びました。当地では産業界だけでなく、行政や教育、医療機関も連携し、足利5S学校(足利5S推進ネットワーク協議会)のもとに、企業の職場改善から地域社会の環境改善までの運動を盛り上げ、全国各地から注目を集めています。

～5Sで地域を元気に！～

足利市は、企業の成長と地域の活性化は人づくりからとの観点で、平成20年に「5Sの街・足利」を宣言し、全国初の街ぐるみの5S活動を推進しています。この活動には、市内の企業・商店はもとより、行政機関や学校、病院、一般個人も参加し、足利流5S活動(次頁参照)を実践して地域を元気にする効果を上げています。足利5S学校の石井金吾校長は、「5Sの心がけが人を育て、企業や社会を良くする力になる。どの企業、どの地域にも通用する活動なので、全国各地に広めて元気な企業、活力ある地域を増やしたい」と荒川区での取り組みを呼び掛けていました。



足利5S学校と交流する視察団

～海外からも注目される足利流5S～

足利5S学校(事務局は足利商工会議所)では、モデル事例の発表会・工場見学会の実施などさまざまな仕組みをつくって普及活動を展開し、「足利流5S活動自体を地域ブランド化」しています。現在、全国の13都府県から160社が入会済みとのことですが、国内だけでなく、海外からも足利流5S活動が注目されています。

なお、今年11月6日(木)、7日(金)には同市で「第2回世界5Sサミット」が開催され、国際規模の成果発表と合わせ、5S活動を通じた産業・文化交流が行われました。

～「継続は力」の5S活動～

菊池歯車(株)(足利市福富新町)は、創業74周年の精密歯車の老舗メーカー。従業員約150人のうち、70%が国家認定の技能士という。5S活動を始めて

ちょうど10年。毎月5日を「5Sの日」として全社員で職場環境を点検し、QMS(品質マネジメントシステム)につなげる活動を続けています。5S活動が職場の日常業務に連動して、ごみのない清潔な環境が保たれ、生産現場ではイレクターと呼ばれる整頓棚を使って作業効率を高める工夫がされています。どの職場にも目標と進捗状況が掲示され、定期的な成果発表と改善提案を繰り返す中で、全社の生産性の向上や省エネ化、人材育成を図っています。

取締役執行役員
の福田博氏は、
「当たり前のことを地道に続けることが大切」と話していました。



菊池歯車の工場

～観光公園も5Sでおもてなし～

(株)足利フラワーリゾート(足利市迫間町)が運営し、花の楽園で有名な「あしかがフラワーパーク」は、年間100万人が来園する開園24年目の観光公園です。従業員は120人余。3年ほど前から、経営に足利流5S活動を導入、来園者へのサービス向上と公園経営の効率化に向けた運動を展開しています。広大な公園では、年間を通じて四季折々の花のイベントが開催されるため、植物を栽培、育成するための社員教育を徹底し、イベント開催や売り場での5S活動で顧客満足度を高めようと努めています。

植物を管理するバックヤードでは、従業員が使用する作業靴や用具類が要領よく整理・整頓され、花の売り場では、スペースを有効利用する工夫や、来場者への対応に気をくばる5Sが実践されていました。

来園者から寄せられる声を重視し、それをヒントに改善を図る手法で、安全対策やごみ問題など園内環境対策を講じている点も特徴的。「5Sを通じて職場を改善し、進化する事業体でありたい」(営業部マネージャーの鈴木一人氏)としています。



売り場にも5S効果

【足利流5S活動】

5Sは、整理(不要なものを捨てる) 清掃(いつもきれいに) 整頓(すぐに取り出せるように)の順序で取り組み、清潔な環境を保つことを習慣づけ(しつけ)る。

本質は3Sにある。整理・清掃・整頓を継続することで、要不要を分別する判断力、細部まできれいにする眼力、すぐに取り出せるよう工夫をする改善力が蓄積され、決められたことを守る習慣が清潔な環境を保ち、人を育てる。

5S活動は、個人の自発性を尊重し、次の展開につなげる継続性が大切。自分のためにという目で見直すことで、会社が良くなり、人々の生活を豊かにする運動に発展する。

5S運動で社会を明るくしよう！

第2あすめし会活動報告② (10月-11月定例会)

第2あすめし会の10月定例会が10月17日(金)、11月定例会が11月21日(金)の17時から産業経済部研修室にて行われました。

10月定例会では、経営計画の作成と活用についてトミー塾長が説明。11月定例会では、実際に2名の会員が、自社の経営計画等についてプレゼンし、活発な意見交換も行われました。

10月定例会「経営計画の作成と活用」

経営計画とはどのようなものかを知るため、トミー塾長が作成した経営計画を説明しました。塾長の経営計画は、1部は経営理念から始まる13項目、2部は各種計画書等(数値化した利益計画書、利益計画検討書、財務計画書、資金運用計画書、要員計画書、設備計画書、販売計画書)で構成されており、生の経営計画に接して会員は重要ポイントを熱心にメモしていました。

また、経営計画の活用について、融資補足資料として金融機関に提出するだけでなく、企業の長期方針立案、社員教育、パブリシティへのリリース、リクルート活動、企業のファンづくり、経営革新、経営改善等にも活用できることを、事例に基づき紹介しました。

その結果、まだ経営計画を作成していない会員から、その必要性について理解することができたとの意見が多くあがりました。

11月定例会「会員による経営計画発表」

10月定例会の「経営計画の作成と活用」を受けて、各社が作成を進める経営計画の実態調査を11月定例会に先立って塾長が実施しました。

その結果、完成度が高かった電光工業(株)の川邊社長と、(有)中央パフ製作所の倉澤部長が11月定例会において、自社の経営計画と月次決算、加えて作成の苦労談を発表しました。

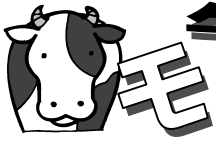
まだ経営計画が完成していない他の会員からは、「とても有意義な発表で、刺激を受けた」「近いうちに完成させて自ら発表していきたい」などの前向きな意見がありました。

その後実施した交流会では、本会に引き続き出席した荒川区高度特定分野登録専門家の奥澤税理士から、経営計画の作成と月次決算の実施についてアドバイスが行われ、会員からの質問も絶えず、学びをさらに深める機会となりました。



会員による経営計画発表の様子(11月定例会)

連載～その13～



牛山博文の！ 毛～ひと工夫！

MACCプロジェクトでは4名のコーディネータによる、きめ細かい企業支援を行っています。

このコーナーでは、牛山コーディネータによる生産管理の事例やMACCコーディネータとしての活動報告等を、わかりやすく連載で皆様にお伝えしていきます。



MACCコーディネータ

早稲田大学ビジネススクール特別研究員

牛山博文

デザイン思考法

○「デザイン思考」の概要

さて、今回は昨今よく耳にする「デザイン思考」についてお話します。「デザイン思考ファシリテーションガイドブック」(一般社団法人デザイン思考研究所 編著)によると、「デザイン思考」では、「常に人間を中心に課題解決を行うもので、人々が本当に望むものを作り出し、提供すること、つまり人間を物語の中心にすることが一番重要になる」とされています。そして実際の活動は“数人のチーム”で行うことが明記され、新しいモノやコトを生み出す活動の中心は“チームでの協働”であることがうたわれています。また、デザイン思考は「人々のニーズや夢、行動を調べることから始まる」とあります。

人々が求めているものは何かを理解し、探求していく“有用性”に着目すること、それから“実現可能性”や“持続可能性”という3つの視点で解決策を見ていくことも重要なポイントとなるとも書かれています。まとめると「チームで、人間を中心とした課題解決を、人々の観察やインタビューをとおして共感することによって行っていく」ということと言えそうです。

この思考法は今までの製品やサービス起点の思考とは違って、新たな価値を創造するという非常に魅力的なアプローチだと思います(詳しくは一般社団法人デザイン思考研究所のHP (<http://designthinking.or.jp/>) をご覧ください。有益な情報満載です)。

さて、デザイン思考の有効性はわかりました。しかし、チームを組めない、例えば企業の経営者や個人が活用できるような、もう少し汎用性の高い思考法はないものか・・・と考えるのは私だけでしょうか？

そのひとつの答えが第1回目に紹介した「イノベーション創出思考法」によるアプローチではないかと思います。

「イノベーション創出思考法」の概要

「イノベーション創出思考法」は早稲田大学で数十年間研究されてきた「ワークデザイン」を母体に、その適用範囲を広げた思考法です。特徴としてはひとりで行える。ある手順に従って思考していくと新たなイノベーションの素になるアイデアを自然に「発見・発明」してしまう。従来の観念にとらわれない未来志向のユニークな発想ができる。

新製品や新サービスといった“企画案”を実現可能なレベルで設計することができる。などが挙げられます。

前述のデザイン思考と異なる点は“個人”でもできる(チームも可)ということと、初めから観察やインタビューなどの“情報収集や分析”をせず、ひたすら“機能”を追求していくことでユニークな発想を発見するという点です。

ひとりだけで本当にユニークなアイデアが生まれるのかと思われるかもしれませんが、でも大丈夫。実はここでの思考自体は普段私たちが行っているもので、決して新しいものではないからです。

では何が新しいのか？それは意識的な“自問自答”を繰り返すこと、そしてそれを文章化すること、文章化の過程で“気づき”や“ひらめき”を発見していく思考法であるという点です。

次回以降は、この「イノベーション創出思考法」を使って「イノベーション・マップ」というものを作っていきます。「イノベーション・マップ」とは、マップを作る過程や完成したマップ全体を俯瞰ふかんすることで、新しいアイデアを発見・発明することができるマップです。では次回以降をお楽しみに。

(以下次号)

MACCコーディネータ TOMMYの部屋 VOL.30



「荒川アントレ物語(2)」



MACCシニアコーディネータ 豊泉光男

新年明けましておめでとうございます。そして、新しい年を迎えて“今年こそは”とお考えのところかもしれません。ぜひ今年は、想いを実現する年になさって下さい。

さて、今回は後継経営者のアントレプレナーシップ(略してアントレ。起業家精神のことを指す。)について考えてみたいと思います。

トミーは、予期せぬ事から30代半ばに社長に就任しました。不安はありましたが、3つの目標「黒字経営 新商品、新事業開発の成功 海外事業展開の成功」を何とか達成することができました。

そして、それ以降、請われて経営後継者たちとお会いするようになり、延べ人数では千人を超えたと思います。そうしてお会いした後継者たちと後継者の会を企画、設立、運営するようになり、その数は10を超えました。荒川区でも「あすめし会」と「ニアス会(第2あすめし会)」の2つの後継者の会の企画、設立、運営に携わらせていただきました。

その出会いの中で、後継者のアントレの発揮には差があるなど感じていました。「一体それはどうしてなのか?」と、とても不思議で、いつも喉に魚の骨が刺さったような気になっていましたが、最近になって少し考えがまとまりました。後継者でアントレを發揮している方は2つの共通項を持っていることに気づいたのです。

共通項の1つ目は、“危機感の保有”です。特に自社の経営に対して強い危機感を持っています。企業経営での危機の一番は存続の危機です。特に赤字に陥ってしまった場合、自らが何とかしなくては行けないと言う強い責任感から、企業改善や改革が実行され、これがアントレの発揮につながっていきます。一方、後継者でも企業経営への危機意識のあまり高くない人は、自分の持ち場の業務のみをコツコツと専念する日々が続いていることが多いです。両者のアントレの差はたった1年でとても大きくなることを多くのケースを通じて実感しています。

米国における革新的大企業についての研究でも社内でも常に危機感の醸成が必要と結論づけています。日本の代表的な大企業であるトヨタ自動車では、自社の危機意識の保有の為に、世界一になっても「トヨタの敵はトヨタ」との名言で戒めています。そこ

で、ニアス会でもメンバーの危機意識と主体性に重点をおいた「気づきワークショップ」を重視するようになっています。

2つ目に注目したのは“逆境体験”です。トミーにとって、冒頭あげた3つの目標は実に大きな問題で、真剣勝負の逆境と言えたかもしれません。また、トミーも支援に携わった(株)浜野製作所は、現在では元気なモノづくり中小企業の代表企業ですが、出会った当時は、災害・不慮の事故・不運が重なり正に逆境の真ただ中でした。

最近の研究では逆境がイノベーションを生むとも、人を育てるとも言われています。経営者は、逆境に遭遇し、対峙し、知恵と努力と情熱で乗り越えていく過程でアントレを發揮し、多くを学び、成長していきます。この事は多くの後継者と接してははっきりとわかってきました。ニアス会では、小さな逆境にチャレンジして、小さな成功体験を実感してもらう事を重視しています。今後は、より大きな逆境にも果敢に挑戦する、本物のアントレを發揮できる経営者へと成長していってくれることを期待しています。

まとめると、経営後継者のアントレは、生まれながらにして發揮できるものではなく、“危機感の保有”や“逆境体験”等を通じて後天的に習得するものと言えます。

荒川区からアントレを發揮する企業が多く生まれることを期待しています!!



アントレについてニアスで熱く語るトミー

< 発行 >

荒川区産業経済部経営支援課産業活性化係
MACCプロジェクト事務局

〒116-8501 東京都荒川区荒川2-2-3

TEL:03-3802-4683 FAX:03-3803-2333

E-mail:macc@city.arakawa.tokyo.jp

URL:http://

sangyo.city.arakawa.tokyo.jp/macc/

登録番号(26)0002号 03